

觀經疏妙宗鈔の我国仏教思想にみる影響

宮澤勘次

一 宝地房証眞の淨土思想

(一) 法華三大部私記の現身往生思想

觀經疏妙宗鈔は、宋の眞宗の五年（一〇二四）、天台十七世四明知礼によつて著されたが、刊行後間もなく、入宋中の、源信の弟子寂照によつて日本に伝えられたものと思われる。

それから百数十年後、平清盛の甥で比叡山の総学頭ともなつた宝地房証眞は、一切經を十六度も検して法華三大部私記を書き上げたが、主として摩訶止觀輔行私記において、妙宗鈔を中心とする知礼の論書が引用されている。

すなわち、摩訶止觀の理即の説明について妙宗鈔一卷の理即の項を引用し、三十二相の説明に妙宗鈔五卷を引用している。

とくに、摩訶止觀第八の「若入無生法忍。因疾雖尽猶有果疾。」の解釈として詳細なる現身往生説を展開している。その立場とする色心不二論は、妙宗鈔の所説と同様であ

る。

また、法華疏私記において龍女成仏について現身往生を論じ、知礼の源信への答釈を引用している。

(二) 大原問答 現身往生をめぐる法然との対決

文治二年（一一八六）ごろ、山城大原の勝林院で、法然は、証眞ら南都北嶺の学匠達と淨土念仏法門について問答した。

大原問答は、天台霞標にもみるが、いま大原談義聞書抄（大正八三）による。

法然が問答の中で、「淨土願教者、或現世或次世、随機利鈍證入無疑。」とのべたのに対し、証眞は、「此宗習不許此土入聖得果。何云現世證入哉。」と問い、指方立相の法然が現身往生を云う矛盾を質した。

これに対し法然は、「章提希夫人於第七觀時得大悟無生。和尚釈之證得往生云云。此即最上利根人信知他力本願之利。現世證得往生也。」と答えている。法然も利根に限

り現身往生を認めていたのである。

証真は夢中に天台大師と投合するほど三大部の研究に打ちこみ、天台浄土思想の神髓を説く妙宗鈔に憑依していたから、よく一山を代表して法然と対決できたのであろう。

証真は、妙宗鈔を三大部私記に残したばかりか、惠檀二流による口伝秘決の宗風を刷新し、叡山天台学の学統を中興した。

後世、妙立らによって天台浄土思想、四明学が勃興したのも故なしとしない。

二 鎌倉新仏教の祖師達にみる影響

日蓮、道元、親鸞ら鎌倉新仏教の祖師達は、何れも早年時叡山に学んだ。そして三者共通して現身往生の教義を説いている。

日蓮は、「生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。」と上野殿後家尼御返事でのべている。

道元は正法眼蔵見仏で、「おほよそ一切諸仏は、見釈迦牟尼仏・成釈迦牟尼仏するを成道作仏というなり。」といい、また「娑婆世界其他瑠璃坦然平生をみる。其他瑠璃を信解する、これ見仏なり」とのべている。

親鸞は末燈鈔の中で、「コノユヘニ臨終マツコトナシ。信心ノサタマルトキ往生マタサタマルナリ。」と説いている。

観経疏妙宗鈔の我国仏教思想にみる影響(宮澤)

それでは祖師方は妙宗鈔を読んでいたものであろうか。

日蓮の聖愚問答鈔の文中、「蚌蛭六即」の文言があるが、これは妙宗鈔初出、知礼独創の概念で、ほかには見ないものである。明らかに読まれていたものと思われる。

道元は入宋して天童如浄に参学したが、如浄の先住子癡こそ、煩惱即菩提をめぐって知礼と問答往来した関係にあり、宝慶記によれば道元は、妙宗鈔の核心である感応道交の義について如浄の慈誨をうけているのである。

後年、正法眼蔵発菩提心として、「感応道交するところに発菩提心するなり。」と表現している。妙宗鈔を見ていたことは間違いない。

親鸞の教行信證には、知礼の後世、宗暁の楽邦文類が数箇所引用されている。楽邦文類と楽邦遺稿には、妙宗鈔の長文が抄録されている。同鈔の過目は確實である。

日蓮は、色心不二論や、用の面である事造(変造)三千論に着目し、事相(有相)の常寂光土を説いた。

観心本尊抄で、「今本時娑婆世界離三災一出四劫常住浄土。」と娑婆即寂光土を説き、別の遺文で、「靈山事相之常寂光土」とのべている。

「即」は一刹那ともよばれる。妙宗鈔で、作是一念遮照同時の場とした此の即を、道元は菩提心の発生機と捉えた。正法眼蔵発菩提心でこうのべる。

「もし一刹那この菩提心をおこすより、万法みな増上縁となる。おほよそ発心得道、みな刹那生滅によるものなり。」と。

親鸞も現身往生の正因を即とした。教行信証行巻で、「即言由聞願力光闡報土真因決定時剋之極促也。」とのべている。

また同書信巻で、「信業有二念。一念者、斯顯信業開發時剋之極促。彰広大難思慶心也。」ともいつている。時剋の極促とは、一刹那・即ということである。

三 江戸時代における四明学の勃興

鎌倉時代の祖師達に明らかに妙宗鈔の影響がみうけられるにしても、妙宗鈔が表面に浮上してくることはなかった。

証真以来、江戸、寛永年間にいたる五百年間、妙宗鈔の名を記録にみることはできない。

(一) 天台問要(百題)自在房と台宗二百題との比較にみる四

明学の流行

百題自在房は、千二百年代の天台学僧静明の撰述とされ、百題の問答で当時の教学上の主な論義が扱われている。これは慶安四年(一六五二)に上木された。

百題自在房の撰述の約四百年後、享保六年(一七二二)に台

宗二百題が上梓された。これは当時盛に論議された論題の中から二百題を精選したものである。

百題自在房から台宗二百題にとり入れられたものは三十五題あるが、百題自在房には、妙宗鈔はもとより、知礼の名は全く見られない。

一方、台宗二百題中、知礼の論書を引用するものは六十九題、三十五パーセントに達する。その六十九題中、妙宗鈔は二十二題、三十二パーセントである。

すなわち、百題自在房から台宗二百題にいたる四百年間に、妙宗鈔は学会の中心に座をしめるにいたったのである。

このような四明学勃興の背景には、いくつかの理由が考えられよう。

法然、親鸞の流の浄土思想が一般化してきたことも原因であらう。

一方、善導流浄土思想の対極にあるものとして、天台浄土思想は決して忘れられていなかった。

例えば、常陸の尊舜が永正九年前後(二五一〇)に著した、法華鷲林拾葉鈔では、「現身往生事」として、こうのべている。

「文時命終往生見サレトモ実義時現身往生明證也。恵心観心略要集云於此命終者、煩惱尽也。即往安楽世界者己心浄土也矣。」

こゝに現身往生のベースとなっていた観心略要集は、やが

て妙宗鈔に交替され、妙宗鈔は天台浄土思想の中核として、善導流浄土思想と対決するにいたるのである。

しかし四明学が浮上した端的な理由は、妙立、靈空らの布教活動であろう。

(二) 妙立と靈空の妙宗鈔普及活動

妙立の高足靈空が、妙立の没年元禄三年、師の手記をとり入れてまとめた妙立和尚行業記によれば、美作の人妙立は、十七歳で出家し、山城花山寺の雷峰禪師に投じた。

印可を得た後、諸国を飄遊し、寛文四年（一六六四）、二十八歳の時、叡山麓の坂本に移住した。

やがて天台三部書を閲読し、四明学に沈潜するにいたった。そして禪門の極則が天台の別意にほかならないと知り、四十歳の時、衣鉢を雷峰に還し、天台に改宗した。

天台霞標収録の妙立の詩に、「堂堂^{トクニ}四明^{シムン}。真是吾師^{トクニ}。何^ニ師^{トクニ}。四明^{シムン}。由^ル有^ル所^ル同^{スル}。」とあるように、知礼に同ずる所ありとして傾倒したのである。

晩年には、諸国に妙宗鈔等を講じた。講録はないが、靈空と義瑞との妙宗鈔講録にしばしば同一の解釈文があるので、恐らく妙立の講義筆記録が残されていたのであろう。

妙立の学風は、四明学を宣揚し、それによって、中古以来叡山に弥漫していた口伝法門の玄旨帰命壇の伝法を一掃し

た。

しかし、妙立の妙立たる所以は、靈空をして闢邪編を著さしめて玄旨帰命壇の弊風を一新し、妙宗鈔を講ぜしめて江戸中期に妙宗鈔を定着せしめたことである。

本邦初刊の妙宗鈔会本は、元禄三年（一六九〇）に出たが、編者は実に叡山の実観僧正であった。実観は天台霞標の中で、靈空を「吾宗偉人」と讃えている。四明学の層はずでに厚かったのである。

しかし、この妙立を中心とする動きによって、中古以来の、天台本覚思想の伝統も影をひそめる次第となったのである。

靈空は、享保十三年（一七二八）、即心念仏安心決定談義本を刊行し、天台浄土思想を普及しようとした。

靈空の即心念仏とは、妙宗鈔にいう約心觀仏のつもりであった。

布教目的の談義形式だけに概念上の厳密さを欠き、それが論争の一因ともなった。

談義本反駁の論書は、浄土、華嚴等各宗から刊行され、享保年間には各宗一様に妙宗鈔の旋風にまきこまれたのである。

〈キーワード〉 妙宗鈔、鎌倉仏教、妙立

（立正大学大学院修了・文博）